

土木×外交 —土木のハードパワー—

Engineering diplomacy - The hard power of infrastructure -

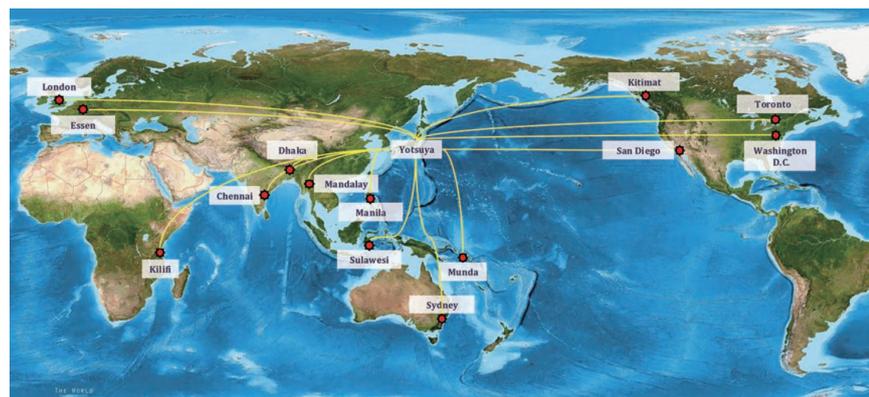
特集担当主査：マエムラユウオリバー（東京大学）

特集担当副査：廣井慧（京都大学）

特集企画担当：青木崇光（国土交通省道路局）、青柳広樹（（独）鉄道建設・運輸施設整備支援機構）、後藤正太郎（（株）建設技研インターナショナル）、藤田クラウディア（大成建設（株））、森章太郎（日本工営（株））、中村智昭（（株）横河ブリッジ）、増田貴之（（株）奥村組）

国際政治の世界では、外交手段における軍事的あるいは経済的「強制力」のことを「ハードパワー」文化のあるいは社会経済的な「影響力」のことを「ソフトパワー」という言葉で表現している。戦後、平和主義・戦争放棄をうたう日本の外交は、「ハードパワー（軍事的強制力）」を用いた外交を展開する術はなく、高度経済成長期を経て、「政府間開発援助（ODA）外交と経済協力」をはじめとする「ソフトパワー（経済的・文化的影響力）」を外交の柱としてきた、この言及は国際政治学の議論の中で多くみられる。ここでいう「ハード・ソフト」は、土木技術者が直観的にイメージする言葉とはまた違った意味合いを含んだ観点であろう。例えば、「ODA」と聞くと土木技術者はまず「施設（ハード）」をイメージするのではないだろうか。一方、外交手段としては、経済的影響力を与える「ソフトパワー」の代表ということになる。

本特集は、一般に直感的な解釈がされやすい「ハード・ソフト」技術を、「ハード・ソフト パワー」という国際政治では比較的直感に反する



ABSTRACT

In this month's issue, we present the political- and diplomatic concepts of "hard" and "soft" power to the engineering community, where we understand "hard" and "soft" technologies in a fundamentally different manner. We present various examples of both "hard" and "soft" technology in the context of global cooperation, which in fact exemplify the traditional "soft-power" approach to Japanese diplomacy.



概念を提示することで、国際社会における日本のリーダーシップとエンジニアリング技術の役割を考えるきっかけを提供することを目指す。

記事内容は大きく三つに分かれる。まず、カナダ、ケニア、インドネシア、ミャンマー、バングラデシュを対象として、さまざまな外交の取り組みや、国々との信頼関係に貢献したプロジェクトを紹介する。エネルギー事業、橋梁プロジェクト、防災セクターと教育、航空セクターにみられる仲間づくりの形が取り上げられている。また、新橋―横浜間の鉄道を例に、日英の近代初期の技術交流についても触れる。次に、「仲間だからこそ言える」と題し、ドイツ、インド、オーストラリアで活躍されている仲間たちに、日本での経験を振り返り、現在居住する国のゼネコン、研究開発、そして教育現場に関する気付きについて執筆いただいた。最後のパートでは、国際公務員あるいは外務省専門家として、国際社会の現場で日本のビジビリティに貢献しながら活躍するエンジニアや技術専門家による記事を紹介する。多様なバックグラウンド

と経験を持つ方々から、非常に幅広い知識と経験をご提供いただいた。そのことを、大変幸運なことであったと感じると共に非常に感謝している。

「ハード」な側面と、海外インフラ案件や国際協力によって表現され強化される「ソフト」な力をテーマにした本特集の企画は、2024年秋ごろから、編集委員会でのブレインストーミングを通して練られてきた。特集のために取材を進め、さまざまな学びを得る中で、国際政治と外交の関係性に関する理解が深まり、土木が果たすべき役割と重要性をあらためて認識することができた。そんな中、2025年5月に「ソフトパワー」という概念を生み出したジョセフ・ナイ氏がハーバード大学ケネディ・スクールからの計報により、逝去されたというニュースを聞き、私たちは大きな驚きと悲しみに包まれた。

編集委員会の一員として、国際関係論と外交の分野におけるジョセフ・ナイ教授の多大なる貢献に対し、心からの敬意を表したい。